

NANJO

2022年(令和4年) 10月



この島を統一した王は、ここ南城市佐敷から誕生しました。あれから650年。どんな人物だったのか、何を今に残してくれたのか。想像を飛ばたかせながら、尚巴志に会いにでかけましょう。

スマホ・PCで詳しい情報をゲット。



- 電子ブック
- 今号の情報リンク
- 10言語対応 (Multilingual)



特 別
寄 稿

琉球の天下人、 尚巴志と その時代



©和々

尚巴志とは、どのような人物で
どのような時代を乗り越えてきたのか。
琉球史研究家・上里隆史先生より
特別に寄稿いただきました。

尚巴志、その出自と人物

沖縄にはかつて「琉球王国」という独自の国家がありました。15世紀の初め、この国を打ち立てたのが尚巴志です。彼は日本の歴史でいうと織田信長や豊臣秀吉に匹敵する「天下人」です。その名前は「尚巴志ハーフマラソン」でよく知られていますが、実際に彼が具体的にどのような人物で、どのような功績があるのかは広く知られているとは言えません。琉球史のなかで果たした彼の事績を紹介していきます。

尚巴志は1372年、沖縄島南部、現南城市の佐敷で生まれました。ちょうどこの年、浦添の察度王が中国明朝との国交を樹立し、琉球が海外貿易に乗り出していく時期にあたります。父は佐敷按司(地域の首長)の思紹。知念半島の一部を領域とする小さな勢力にすぎませんでした。後世に書かれた歴史書『球陽』によると、彼は身長5尺(およそ150センチ)に満たず、「佐敷小按司」と呼ばれていたといいます。しかしその性格は「胆大にして志高く、雄才世を蓋う」また「英明神武にして擎天の翼あり」と評され、非凡なる才能を持って

いたようです。

彼の人となりを知るエピソードが残っています。幼年の頃、尚巴志は佐敷の隣にある与那原に遊び、そこで鉄鍛冶に刀を作らせませす。しかし鍛冶は農具の製造に忙しく、3年後にようやく完成しました。おりしも与那原の港には鉄塊を積載した外国船が来航しており、外国商人は尚巴志の刀を見てこれを欲しがります。尚巴志は商人の鉄塊と自身の刀と交換し、それを惜しげもなく民たちに与えて農具を作らせ、人々の心をつかんだという逸話です。この話は前代の察度王にも共通する内容であり、一種のパターン化された伝承と考えられますが、沖縄で鉄は産せず輸入に頼るほかない貴重品であったこと、与那原が沖縄島における海上交通の要衝であったことは事実であり、貴重な鉄農具の配布が領民の支持を獲得する有効な手段であったのは充分考えられることです。

また近世の歴史書『中山世鑑』には「進んでは万人をいつくしみ、退いては自身に欲があることを恥じ、謙虚でおごらず、安全な時も危機の備えを忘れず、民が飢えると自らも飢え、民が寒がれば自分も寒い思いを



島添大里按司を倒した後
尚巴志が居城とした島添大里グスク



佐敷グスクのあった場所には
「月代の宮」として第一尚氏が祀られている

して、すべて人の憂いばかりを嘆いたので、南方の按司たちは尚巴志に帰服する者が多かった」とあります。年代は特定できませんが尚巴志の時代とほぼ同時期につくられたとみられる神歌(オモロ)もあり、そのなかで「佐敷の苗代に生まれたのは真物(優れた者)だ」と称え、また佐敷グスクの門口に羽ばたく「鬼鷲」を謡っています(『おもろさうし』)。名前は明記されていませんが、これらは尚巴志を指している可能性があります。

なお「尚巴志」の名は、もともと「小按司」あるいは童名「サバチ」などの読みを中国向けに漢字にあてたもので、やがてそれが便宜的に王家の姓に変化したと考えられます。父は同時代史料で「思紹」としか登場せず、「尚」の姓を冠する「尚思紹」の名は後世に創作されたものです。当時の琉球の人々は基本的に姓はなく、後の童名にあたる名前しかありませんでした。そして中山王となってから名乗った神号は「勢治高真物」。「霊力の高い優れた者」を意味する名前です。

三山統一への道

尚巴志が生まれ育った14世紀後半の沖縄島は三つの勢力(三山)に分かれ、互いに争う戦国の時代でした。今帰仁グスクを拠点とする山北(北山)、浦添グスクを拠点とする中山、島添大里グスク・南山グスクを拠点とする山南(南山)です。

そのような中、尚巴志は1402年、31歳の頃、父の

思紹より家督を譲られ佐敷按司となりますが、この時、彼の人となりをかかうことができる興味深い話が歴史書『球陽』に記されています。父の思紹は尚巴志にこう申し出たといいます。

「昔、玉城王が徳を失い政治をおこたり、国が3つに分かれ、100年も戦いがやまず、民は塗炭の苦しみは続いている。今の按司たちをみるに、それぞれ武力を誇示しているが皆、家を守る犬であり、ともに行動するに足りない。だが、今の世にただお前一人(尚巴志)だけが大事をなすことができる。私に代わって佐敷按司となり民を水火の中から救えば、わが願いは叶う」

尚巴志は父の思紹から譲られて佐敷按司となると、ここから琉球統一の覇業が開始されることとなります。飛躍の大きなきっかけとなったのが、南山の有力按司であった大里按司の打倒です。佐敷近隣の大里は「島添(村々を支配する意味)大里」と呼ばれ、『明実録』に登場する「承察度」は代々の大里按司を指していたと考えられます。1402年、尚巴志は機先を制して大里按司を急襲。尚巴志軍には勇猛な兵が多く、不意を突かれた大里按司軍は壊滅しました。尚巴志は日本の戦国時代という「桶狭間の戦い」に匹敵する大勝利を得て、琉球にその名を轟かせたのです。なお彼はこれ以降、大里グスクに拠点を移し、その後15世紀後半頃まで首里城とともに第一尚氏の拠点として使われ続けます。

勢いに乗って1406年に浦添グスクを拠点としてい

尚巴志の生涯

1372年	現在の南城市佐敷に生まれる
1402年	父・思紹より佐敷按司を受け継ぐ 島添大里按司を討つ
1406年	中山王・武寧を滅ぼす
1416年	北山王・攀安知を滅ぼす
1422年	尚巴志が中山王に即位
1429年	南山王・他魯毎を滅ぼす
1439年	逝去(67歳)



た中山王・武寧を滅ぼし、父の思紹を中山王の位に就けました。ここに思紹・尚巴志親子は三山最強の勢力だった中山を掌握します。思紹・尚巴志親子は拠点为首里へと移し、当時活況を呈していた港湾都市・那覇港にあった華人居留地の久米村とも強固な協力関係を築いていきます。王茂や懐機といった華人を王国ナンバー2の地位の王相(国相)に就け、海外交易も掌握し、さらに力をつけていきました。

1416年には今帰仁グスクへ軍勢を派遣して北山王の攀安知を滅ぼした後、首里城周辺(中山門や龍潭など)を整備して王都の威容を増します。父の思紹の死後、1422年には尚巴志が中山王に即位します。そして細々と続いていた南山王の他魯毎を1429年に攻めてこれを滅ぼし、ついに沖縄島を統一します。450年にわたり続く「琉球王国」を樹立したのです。尚巴志はこの10年後、1439年に67歳でこの世を去り、首里の天山陵に葬られました。この時、琉球の民はみな「天に号泣」してその死を悼んだと言います(『歴代宝案』)。

資料から見る、実像と時代

さて尚巴志の生涯をたどってきましたが、彼が生きていた当時の史料はきわめて少なく、その多くが後の時代に記された近世の歴史書を根拠としています。ただこうした史料は数百年後の伝承が混じっていたり、当時の価値観のバイアスがかかっているため、その実

態が必ずしも明らかにされていない場合があります。しかし、近年の琉球史研究では、リアルタイムの史料の分析から、尚巴志をめぐる実像が明らかにされつつあります。その一端を紹介しましょう。

沖縄県内には尚巴志の時代に書かれた紙の史料は一つも残っていませんが、実は本土には第一尚氏の時代の手紙が伝わっています。南九州の領主・阿多氏のもとに送った書状がそれです(「阿多文書」)。文面は漢字交じりのひらがなで書かれ、1420年頃のものとして推定されています。ちょうど思紹王の頃です。琉球からの漂着船の保護を求めたもので、この詳細は使者である僧が説明する、という内容です。

送り主の名前には「代主」とあり、「海印」という朱印が押されています。「代主」とは「世の主」すなわち「王」のことで、第一尚氏の王の印鑑はのちの「首里之印」ではなく「海印」だったことがわかります。「海印」は「すべてを覚知しうる仏の智」を意味する仏教用語です。琉球の仏教については、15世紀後半の尚泰久王の時代にさかんになったことが一般的に知られていますが、実は尚巴志の頃から信仰され、「十刹」という官営の寺院群があったことがわかっています。「海印」の存在は、第一尚氏の初期にも仏教が信仰されていた証明にもなります。書状中に登場する「使僧」の存在も、それらを裏付けています。

仏教を信仰する一方で、尚巴志は熱心な中国道教の信者でもあったことがわかっています。晩年、体調を



第一尚氏の印「海印」
(阿多文書をもとに上里作成)



Profile

上里隆史
(うえざと・たかし)

1976年生まれ。浦添市立図書館長を経て現在、内閣府地域活性化伝道師。沖縄県知事の有識者会議「万国津梁会議」(琉球文化ルネサンス)副委員長。専門は琉球史。著書に『尚氏と首里城』(吉川弘文館)、『マンガ沖縄・琉球の歴史』(河出書房新社)、『琉球という国があった』(福音館書店)ほか多数。NHKドラマ「テンペスト」時代考証、NHK「プラタモリ」案内人などもつとめる。

崩した彼は懐機とともに中国江西省にある天師道の総本山・竜虎山に体調回復のお札を求めている、死後には懐機が尚巴志の死後の供養も求めています(『歴代宝案』)。

また考古学的な資料からは、島添大里グスクの発掘調査によって正殿の基壇・御庭部分から火災の跡が見つかっています。尚巴志に滅ぼされた戦火による可能性が指摘されています。佐敷グスクの調査からも、土を主体とした城郭ながら、土の表面に階段状に石を貼り付けた特異な構造をしていることがわかり、尚巴志が人生の大半を過ごした場所の実態が明らかにされてきています。このように、リアルタイムの史料からは、これまで見えてこなかった尚巴志の人間像やその時代が垣間見えてきます。

南城の地が育んだ英雄

尚巴志の偉業は「琉球」というかたちを作り、現在の「沖縄」という「まとまり」につながる基礎を築いたことです。首里を国と中心として定め、察度の時代から始まった海外貿易を発展・継承させ、外来のさまざまな文物が沖縄に入ってきて、それらを地元のものと組み合わせることで沖縄の文化が築かれていきました。そうした意味においては、尚巴志は現在のわれわれとまったく無関係ではない、とすることができます。

また小勢力にすぎなかった立場から自身の力と決断

で運命を切り開いて、ついに琉球の頂点へとこのぼりつめたことも忘れてはなりません。それまでの「時代」を劇的に変革し、新しい未来のかたちを作った人物は、琉球の歴史の中でもそうそう多くありません。

そして彼の人生をたどっていくと、興味深いことに気づきます。天下に大きくはばたいた尚巴志ですが、実は31歳まで、人生の半分近くは南城市の佐敷の地で暮らしているのです。彼が生まれ、青春を過ごし、さまざまな経験を積み、「天下の器」たる人格を形成したのは、この南城市の地なのです。誤解を恐れず言えば、彼の実質的な人生の中心は佐敷であって、それ以降の天下取りの偉業は、佐敷で培ったすべてが花を咲かせ、果実となった結果に過ぎなかったと言えるのではないのでしょうか。

南城の地が生んだ希代の英雄・尚巴志。2022年は生誕650年、即位600年という節目の年でもあり、南城市を発信地に、沖縄の内外で広く認知されるきっかけとなることを願います。

Information

上里隆史先生を講師に迎えた文化講演会を予定しています。詳しくは裏表紙のイベント情報をご確認ください。



仲村渠浩美

Nakandakari
Hiromi



自由に、自分の、夢を見つけて。

歌三線、太鼓を交えながらの紙芝居。市の事業として毎年、小学4年生を対象に市内の小学校を巡業する。紙芝居「尚巴志 未来へ一歩踏み出す勇氣」の原作を担当し、語り部として尚巴志のストーリーを伝えているのが仲村渠浩美さんだ。

もともと妄想するのが好きだった仲村渠さん。人前に出るのが苦手だったが、子どもが通う幼稚園で読み聞かせに挑戦したことが、今につながるスタートだった。

「ある日、幼稚園の先生から百名に関する大型絵本を作してほしいとお願いされたんです。私、歴史が大嫌いだったのに！」

図書館で調べると、百名には琉球発祥の伝説が多くあることを初めて知り、興味が湧いた。地域の歴史をよく知る人々にも話を聞いた。

「あまりの知らなさに叱られちゃって(笑)。あなたが作れるの？って。でも何も知らない私の目線からお話をつくることで、子どもたちにもわかりやすくなるんじゃないかと信じていました」

七転八倒しながらも、教育委員会のチェックを受けながら第一作の「グスクロード」は完成。勇気を振り絞って踏み出した一歩だった。

「これまで、イラストを描いてくださる方や、音楽を担当してくださる皆さん、読み聞かせのメンバーに、支えられながら楽しんでやってきました。感謝です」

それ以来、さまざまな地域の物語を書いてきた。その魅力をこう語る。テレビ番組で高齢のおばあちゃんが語った昔話。無理やり猿に嫁入りさせられることになった娘が、

道中、猿を川に落とすというお話。聞き手が「お猿さんかわいそう！」と言うと、おばあちゃんは「私はヤッターって思ったよ」と笑ったという。

「そのおばあちゃんの地域・時代は、縁談の多くを周囲が決めていたそうです。昔話って、言葉にならない部分もたくさん含んでいて、人によって受け取り方もさまざま。正しい・間違いではなく、感じたままがいい。読む状況で変わるもの。子どもたちにはどこか『こんなふうに思っている、こう言った方がいいよね』って感覚がある。せめて読み聞かせの間は、子どもたちが自由に想像して、自分の世界を自由に作ってほしい」

紙芝居「尚巴志」では、尚巴志のように夢を持つ大切さをメッセージに込めた。

「踏み出す一歩が、自由な一歩であってほしいと思います。何を目指してもいいんだよって。周りから『頑張り』と言われることより、自分で見つけた夢からはじまったものって、原動力が何倍も違う」

紙芝居を終え、仲村渠さんは子どもたちへエールを送る。「どんな夢を持っている？って聞かれると、尚巴志みたいに王様にならないといけないのかなって思うかもしれないけれど、お友達にやさしくしたいなとか、畑仕事を手伝いたいなとか、小さな目標・希望・願い、ぜんぶ夢。ひとつずつ叶えていってね。そのとき忘れないでほしいのが周りの人への感謝と思いやりの気持ち。いつか大人になって大きな夢に出会えたときに、叶えてきた小さな夢たちが自信になって、周りの人々があなたを支えてくれるよ。チバリヨー！」

なりたい自分を見つけたら、まず走り出す。

特にスポーツが好きというわけでもなく、ただマラソン大会の成績が良かったから入った中学の陸上同好会。3年生の元旦、テレビでニューイヤー駅伝を見た。実業団日本一を争う大会。親から『走って給料をもらっている人たち』と教えられた。

「大好きな走ることを仕事にしてお金を稼げるんだ！って。それで実業団を目指すことにしました(笑)」

単純な動機。周囲が『無理だよ』という中、何の根拠もなく、実業団に入ることは確信になっていた。

駅伝実業団の名門・小森コーポレーションのキャプテンを務めた濱崎達規さん。6年間走り続けた実業団を引退した今は、南城市役所に勤めるかたわら、大人から子どもまで幅広い年齢層が参加する陸上クラブチーム「なんじいAC」のコーチの顔も持つ。市内中学校の陸上競技で好成績を残す生徒の多くが、「なんじいAC」に通う子どもたちだ。

立ち上げて4年目。今では70名近くの大所帯に膨らんだ。「なんじいAC」から巣立った1期生も今や大学生。OBの中には箱根駅伝出場を狙える子もいる。沖縄は陸上長距離が弱いと言われるなか、彼らの「轍(わだち)」を切り開いてきた濱崎さんの影響は大きい。

「高校の陸上部にスカウトされたとき、実業団の前に高校駅伝と大学の箱根駅伝があるということを初めて知りました」

夢の実現にはステップがあることを知った濱崎さん。すべては、どうしたら実業団に入れるか、ということを考えて行動してきた。高校1年で全国大会に初めて出場。

「レベルの差を見せつけられました。県大会ではダントツ1位なのに全国では最下位レベル。ショックのあまり『沖縄でトップだからいい』と逃げそうになりました。でも、実業団に入るには沖縄のトップではだめ。どうしたら全国のトップになれるかを考えるようにしていましたね」

大学でも、濱崎さんにとって箱根駅伝はあくまで実業団に入るための手段。周囲はチームの順位にこだわる中、個人のタイムで箱根駅伝出場を勝ち取り、実業団に入る夢を叶えた。

「実業団に入ってから毎年ニューイヤー駅伝に出場できて。今も自分の土台になっている誇らしい6年間です。でもシビアな世界。戻りたいとも思わないですね(笑)」

今の目標は沖縄の長距離を盛り上げること。沖縄に帰ってきたのもそのためだ。後進を育てつつも、子どもたちの刺激になればと、自身の大会出場もコンスタントに続けている。自身の背中を見せながら、子どもたちの背中を押す。

「南城市の子ども達ってとてもやさしい。もしかしたら、親や友達に『無理だ』とか『心配だ』とか言われると、あきらめちゃうかもしれない。でもやっぱり、なりたいたったらそこに突き進めばいいし、そこでなにか障害があったら、そのとき考えればいい。なりたいたったら、まず走り出してみること」

目標をシンプルに捉え、その実現のために緻密に思考・行動する濱崎さんの姿はどこか尚巴志にも重なる。「琉球をひとつする」という夢を叶えた尚巴志の勇気を、現代に生きる私たちも宿していきたい。



濱崎達規 Hamasaki Tatsunori



尚巴志王 生誕650周年記念 関連イベント情報

「英雄 尚巴志 -はじまりの統一王-」巡回展

① 沖縄県立博物館友の会 ☎ 868-2722

琉球史上における稀代の英雄、尚巴志が生誕して650年、国王に即位して600年を記念した企画展示。尚巴志がたどってきた道のりと国王に即位するまでに経てきた所縁の地をパネルで紹介していくと共に、一部会場では尚巴志に関連する遺跡から出土した資料を展示いたします。沖縄県立博物館・美術館(展示終了)、南城市、うるま市の3カ所での巡回展示を予定しています。

南城市会場

🕒 10月26日(水)～11月27日(日) 8:30～12:00 / 13:00～17:15

📍 南城市役所 2階 共用スペース

¥ 無料

※11月12日(土) フィールドツアー尚巴志史跡めぐりを予定

うるま市会場

🕒 12月1日(木)～12月26日(月) 9:00～18:00

📍 阿麻和利パーク企画展示室

¥ 無料

※ワークショップ、フィールドツアーを予定

令和4年度 南城市文化講演会 「琉球の天下人・尚巴志とその時代」

① 文化課 ☎ 917-5374



講師：上里 隆史

本誌に特別寄稿をしてくださった上里隆史先生による文化講演会です。奮ってご参加ください。

🕒 12月4日(日) 14:00開演 (13:30開場)

📍 南城市役所 1階 大会議室

¥ 無料

※当日は、併せて令和4年度南城市琉歌募集事業表彰式を行います。